

氏名	STOCKER SAMUEL
ヨミガナ	ストッカー サミュエル
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第571号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 リサーチと相互作用の触媒としての展示のロケーション 〈作品〉 時間と場所のナラティブ 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小山 穂太郎
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	ミヒヤエル シュナイダー
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	保科 豊巳
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	トム ヘネガン
（副査）	東京藝術大学	名誉教授	（）	坂口 寛敏
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

タイトルにあるように、ロケーションは私の制作活動における主要な役割を果たしてきた。ロケーションを扱う際には、4つの段階がある。まず、場所に対して直感的に反応する。ここで直感的というのは、個人的な興味、継続的な学び、過去の経験、憧れという4つの要素で構成される。2段階目のレスポンスは、リサーチの過程だ。歴史的、文化的、そして、環境的な特徴など、場所についての情報を調べる。展示のロケーション周辺を歩き回ること、地域の人々と会話をすることも含まれる。3段階目は、素材だ。常に、周辺地域で素材を入手しようと試みる。これには地域の人々からもらった中古素材や、地域の店舗で購入したものが含まれる。最後の段階は、現実だ。1つのギャラリー空間で可能なことが、別の空間では不可能なことがある。空間と交渉した成果が、私の作品だ。

博士課程審査展に向け、私は人々に自分の芸術実践を理解してもらうために役立つ作品を制作することにした。本論文ではその過程を論じるが、断片的で抽象的な表現方法を採用する。引用や論理的な説明文、そして自分の感情をそれぞれで異なるフォントを用いて表記する。というのも、私は失読症を抱えているため思考回路や情報処理の仕方が健常者とは異なるようだからだ。このようなアプローチを取ることにより、読者が独自の視点で本論文を理解する余地も残している。この点は、物理的な作品にも当てはまる。鑑賞者独自の視点で作品を鑑賞し、自分なりの印象やナラティブを生み出してもらいたいと考える。また、本論文を理解する助けとなるよう、本論文の全体要素を包括するマインドマップ、および各章のマインドマップも添付した。マインドマップの作成は、情報整理に役立つ。同時に、これは私の考え方を提示する最適な方法だ。

まず第1章では、人生における重要な出来事について触れ、サイトに加えて個人的な経験が私の実践におけるカタリストとなってきたこと、またその出来事が作品にもたらした影響を説明する。

第2章の主要なトピックは、ロケーションだ。私自身にとってのロケーションとサイトスペシフィックの意味を定義し、それが一般的なサイトスペシフィックな概念とどのように異なるかを説明する。アンゼラム・キーファーの例を取り上げる。

第3章では、リサーチの手法や、マーク・ロスコ、アミカム・トレン、およびマイク・ネルソンなど影響を受けたアーティストたちを紹介する。過去3年間に渡るリサーチの過程で撮影した写真も含める。

第4章では、素材について論じる。ヨーゼフ・ボイス、アンゼラム・キーファー、ロバート・ラウシェンバーグ、ヘレン・マーティン、クレイ・カッター、ドリス・サルセド、ペドロ・カブリタ・レイスの使用した素材に言及し、日常的な素材の使用を探る。

第5章は、主に博士課程に在籍中に制作した代表的な作品を紹介する。これらのプロジェクトが進化し、審査展に出展する作品へとつながる。「Under the Surface」の展示に向けた作業中、直近の作品における主要な特徴の一つである六角形にたどり着いた様子（時間や形、モチーフをつなげること）を提示する。

最終章は、博士審査展に出展する作品に焦点を当てる。修了作品展と同様に、上野公園が作品制作のカタリストとなった。前回は建物に焦点を当てたが、今回は人に注目した。上野公園の居住者であるホームレスと野生動物を取り上げ、ホームレスの問題に対する潜在的な解決策として家または部屋と仮定する。ホームレスが野生動物のように他人に気付かれずに快適な生活を送れる可能性を含む4つの状況を特定した。大学を上野公園のモデルと捉え、学内に16点の作品を設置することで空間に介入した。この介入は、マインドマップに類似したねずみの巣穴の図に基づいている。更に、上野公園からモチーフを選択して主要なインスタレーションに適用した様子や、複数のインスタレーション制作の基盤となったタイムラインなどを説明する。また、会期中に公開制作を行った際の調査やキーワードなどにも言及する。

（論文審査結果の要旨）

サム・ストッカーによる博士学位論文「リサーチと相互作用の触媒としてのロケーション」は、自身の約10年に渡る芸術的表現の展開と、その芸術的実践を支える理論的骨子の文脈化及びリサーチを纏めたものである。

アイデア及びリサーチを適切な言葉（文章）で表現する方法を模索した結果、ストッカーは独自のコンセプトを確立しこの論文を書き上げた。標準的な学術的作法から脱却したこの論文は、複数のコミュニケーションの手段を組み合わせることで成り立っている。

言葉によるコミュニケーションの手段では、3種類の異なるフォントが並存し、それらが2つの異なる視覚な情報手段と組み合わせられる。これらの要素が多義的な読み解き方を可能とし、これはストッカーの仕事の根幹を占める彫刻作品にも言えることである。

一つの文体（フォント）が内面的なモノログと詩的な自己表現の間で揺れる、主体に対する感情的なアプローチを表現する一方で、別の文体（フォント）がストッカーの作品に関係する、美術の言説で重要な位置を占める作家や理論家の声を表している。もう一つの文体（フォント）はリサーチからの事実検証とリサーチ、直感、芸術的実践、空間の体験から培った知見の組み合わせを表すため使用される。

ストッカーは立体作品から空間を構築する一方で、自身が携わる空間も同時に流用しており、この論文もまた同様の方法論で書かれている。ストッカーの作品がマッピングを介した空間の体験と空間のコンセプト化から現れ始めるように、彼の理論もまたマインド・マップから始まっているのである。

この論文では、存在と空間の相互作用を理解する上で重要な要素を表すために、マインド・マップが実際の作品を示す地図に組み合わせられており、これにより実空間での体験と共にアイデアと理論の空間を体験することを可能とする。

コンセプトに基づき構成された空間、東京藝術大学大学美術館のそのキャンパスで行われた博士審査展で展示された作品により再定義され、介入され、生成された空間との相互作用の組み合わせにより、観衆は想定された手段による単なるコミュニケーション以上の体験をすることとなる。この分離不可能な体験は、コミュニケーションの可能性を革新的な組み合わせで提供し、これにより観衆はストッカーの作品に内在する独特な表現に通じ、理解することが出来る。

多段階の翻訳や複数媒体への転換に基づくストッカーの作風は、本論文にも反映されている。原文は

英語で書かれ日本語に翻訳されている。そこでは、また異文化空間に於ける関係性、表現、空間、プライバシー、社会的構成の概念が融合している。この複次元的な作品を理解するには、全構成要素の複雑な相関性を念頭に置きつつ、学術的作法から離れ、ポイエシスな実験空間に入り込まなければならない。

非常に特異ながらも視覚的な明快さをもたらした構成の論文は、審査員一同が博士学位に相応しいとして高く評価するものである。

(作品審査結果の要旨)

サムストッカーの作品は博士課程以前から既にアーティストとして多くのアートプロジェクトに参加し、地域アートの芸術祭に招待され多くのインスタレーション作品を制作し活躍をしている。多くの作品は制作の地域や場所との関係性の中で建築的な空間を意識した構造物を構築したインスタレーション作品である。作品のテーマの核心は、場所と時間に関わるナラティブであり、作品題名の「時間と場所のナラティブ」とは一般的なストーリーの意味とは違って、ナラティブにある普遍的な構造への関心、語り手の位置、語りが生み出す時間などへのこだわりである。人間はナラティブを受容することで、さらにナラティブを語ることで、自己と社会を分節化し、構造化していくつまり、特定のナラティブを通じて世界を認識することで、社会的な権力構造と主体の位置が構成されると考えられる、このような構造的な関係からのナラティブの意味であると考えられる。

作品はこのように様々な作品要素の複合的な構造を持ったインスタレーション作品である。今回の審査の作品は東京藝大の学内に16点の作品を設置して広く点在されており、作品のサイズや素材も様々な構成されている、基本的に構造は六角形の形体で構成されていて環境と大きく関係している、主な作品制作におけるキーワードを拾ってみると、

- 1、ロケーション、上野公園上野公園の居住者であるホームレスと野生動物。
- 2、大学を上野公園のモデル学内に16点の作品を設置する、個人的な経験、
- 3、日常的な素材、廃材、
- 4、六角形（プロザックの化学構造） 六角形は様々な形状をとる。自然では、石や化学構造、蜂の巣に見られる。

作者は藝大の校地に限らず上野公園全域にリサーチを広げた生態系、社会性との関係の中で思考していることが作品からイメージできる、ホームレスの問題に対する潜在的な解決策として家または部屋と仮定することやホームレスや生息する動物、昆虫等の自然生態の中で構造のナラティブとしてのインスタレーションを形体化している。目に見えない生態系の視覚化は、我々の作品に対する視点を作品の持つバックグラウンドに引き込んで行き、我々の視線の拡張を覚醒させ、さらに校内の廃材、建築材を素材として利用することでさらに作品の持つ社会性に現実感を与えている。

作者は、博士論文中で「サイトスペシフィックなアイデア」の中に書かれている「芸術と生活との間の空間」に関連して次のように綴られている。「既に存在していたかのように生活空間に適用できるか？または、既に存在していたかのように見えたり動いたりするもの、もしくは日常生活に溶け込むものを作ることができるか？」「もし自分が今日家を見つけないといけない難民だったら。もし自分がホームレスだったら。自分のための場所、少しの間だけでも安全にすごせる場所、子供のように空想に耽ることのできる場所が欲しいだろう。」作者はこの周辺の環境ロケーションから作品の発生を生み出そうとしているコンセプトがうかがえる。

美術館前に置かれた大型の作品には、本来であれば上野公園の居住者であるホームレスに野生動物のようにこっそり他人に気付かれず住んでほしいと願う作者の意志が潜んでいて、作品はこのように仕掛けられている。作品が半ば未完成に制作されているように見えることもこれを考えれば構造として完成されているというより、むしろ流動的な構築物として新たなナラティブな言語を獲得している。

作品の材質も極めて触覚的であり、形体も建築物が地中から突き出た地下施設の一部のようにも見える。大きさの間隔も周辺的环境に対応して高いレベルのリズムと想像力を掻き立てる作品として成功し

ている。ドローイングで見せたマインドマップに類似したねずみの巣穴の図が地下に世界を形成しているのではないかという想像までわきたたせて、視覚世界を拡張させてくれる。

作者はこの作品は未だ未完成であると故意に語っている。私たち観客は、ナラティブが世界は終わることなく我々のイメージと現実を往還しながらドラマを作り続けるといった畏にはまっていく。作品が現実を露わにしたときに、制度的な社会性と自由な作品制作にズレが起きる。作者の作品は、概して空間との交渉であり、ズレを見せることでもあるということである。

環境の現実にならティブを生み出すこの作品は新たな現代芸術における表現の地平を開く可能性がある高いレベルの作品であり、全員の審査員が十分に博士課程作品として合格に値すると判断した。

(総合審査結果の要旨)

サム・ストッカーの本論文「リサーチと相互作用の触媒としてのロケーション」では、第一に“ロケーション”が制作の主要な役割を担っていることが示されている。そして制作の方法においては作品タイトルにもある“ナラティブ”がキーワードとして浮かび上がってくる。

論文では、文章は断片的な記述、即物的に書き列挙されたものが記され、テキストは3種類の文字フォントが使い分けられて表記されている。一つは作者の研究に関する実際的な論考に用いられ、もう一つは内的な思惟、詩的で個人的な表現、そこには感情的なものも表出される。そして、さらに一つは引用する他者の言説、これはレファレンス（参照）の一つとして機能する。これらの組み合わせや相互作用、洞察によって、作者の直観的なアプローチが活かされて表現されている。それまでの作者の経験が単に積み重ねられるというだけではない、別の回路に繋がりと、異なる出入り口を経由して連関する。さらには新たな経験がリサーチの過程で発見される。それらは作者が提示しているマインドマップの図によって視覚的、直感的に捉えることができる。

サイトスペシフィックアートとの関連が考察され、サイト（場所）への関わりは、実に多様なリサーチを経ることに連なる。場所・土地・地域の歴史、そこに住む人々、人々からの聞き取りもある、最新の作品制作では生息する動物の存在の有り様にも関心が及ぶ、それらは有機的に繋がる要素となるのである。その場所に存在するオブジェクトには、建築物は勿論だが、例えば、モニュメント、石灯籠、一時的な工事の囲いなどもある。さらに、それらのオブジェクトの歴史性はリサーチされ、他の出来事の参照（レファレンス）と連関を持って作品構造に組み込まれる。作者のナラティブな制作手法によって、多様な経路が繋がれ浮かび上がってくるのである。

作者自身、「大量のレファレンスを複雑にすることが、予想外の作品の制作につながる。」「幅広い文脈や、文脈と無関係のレファレンスを用い、物事をつなげる。」、そして、「全てを表現したり見せ過ぎたりせず、夢想してもらうための余地を残しておきたい。私は、想像力をかき立てるゲームの中に入っていきたい。」と述べている。

博士審査展において、藝大構内の屋外に大学キャンパスに介入すると云う作品を展開した。唯一屋内では、大学美術館3階テラスのスペースを利用し、作者のマインドマップ、平面作品（絵画）と鑑賞者に問かけるホームレスについてのアンケートを記述する場を儲けた。この3階テラスは、すぐ下の大学美術館屋外に設置した作品／六角形の構造物の内部が上から覗き見ることができる位置（ロケーション）となっている。「時間と場所のナラティブ」と題された作品が合計で16点制作された。

この作品は上野公園から始まっているが、美術館、カフェ、モニュメント、緑地など、藝大の大学キャンパスを公園の模型として使うと云う、他の公園の空間と同様の特徴を持つ藝大は、現実の世界に制限されることなく、物事が提案され、研究され、試行される場所であると作者は捉えている。リサーチは公園に生息する動物にも向けられた。自然のなかで住处を構築する動物たち、モグラやネズミ、そして昆虫などの動物を特定したとある。モグラの巣穴の構造は、作者のマインドマップの図が示す関係に酷似し、点在する作品の関係にも反映されている。

もう一つの重要な要素は、上野公園のホームレスの人々である。作品はすでにそこに普段からあることが当然のように存在しているものに似せて作られ、付加された偽扉がどこかへ通じていると想像させ、

かつ、ホームレスがそこに滞在する可能性があるものが作られている。さらにそれらの六角形の構造は、岡倉天心の彫像とベンチで囲まれた木、抗鬱薬のプロザックの化学構造、お化け灯籠の六角形と灯籠が奉納された年代の出来事へと参照され、独自のナラティブが連なっていく。これらの状況において、その構造の中に気付かれずに滞在ができるので、ホームレスを助けるものとなると作者は考える。ホームレスの状況を扱う様子について人々が独自のナラティブを提示することができるように、美術館のテラスに人々がコメントできるノートを置き、レファレンスとして機能させている。最後に「明らかにホームレスの問題は、上野公園だけに存在するのではない。これは世界的な問題であり、私は今後の作品を考えリサーチするにあたり、本プロジェクトとロケーションを一つのカタリストとして使用する。」と述べて閉めている。

サム・ストッカーの論文と作品は、すべての構成要素が複次元的であり、複雑な相関性を持ったポイエシスな実験の場となっている。現代美術の実践としてユニークな方法を提示していることを審査員一同が高く評価して博士学位合格とするものである。